
オープンドシール

鳴鐘新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オープンドシール

【Nコード】

N5764Z

【作者名】

鳴鐘新都

【あらすじ】

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に

居座り続けていた……

そんな御伽噺のような伝承の残る異世界があることなど知らず
現代の日本から落ちてきた少年桜田雪平の人生は一変する。

彼を待つのは戦いと旅の日々、そして仲間との出会い。

頼るべきはチートなどではなく己の心、鋼の魂。彼の明日はまだ見えない。

プロローグ（前書き）

異世界トリップものです。

暇つぶしくらいの軽い気持ちで読んでいただけると幸いです。

プロローグ

「……いてえ」

学校の帰りに突然目の前が真っ暗になったかと思うと次の瞬間には背中に物凄い衝撃が走った。

あたりは妙につんとする黴と木の匂いが鼻を衝く。

「おい、お前大丈夫か？」

声をかけられた。よく通る男の声だ。

声の主を探すとそこには妙な男が居た。

年のころは二十代だろうか？

顔立ちその物は美形。だが格好と眼と髪が奇妙だ。

長めの銀髪に紫の眼。それになにかのRPGや漫画の登場人物のよう
うな

黒の鎧に腰に帯びた剣。

「くっそ……これが大丈夫に見えるかよ……」

「立てるか？手を貸すぞ」

謎のコスプレ野郎に腕を貸されて立ち上がる。

「ありがとう、助かったぜ……でも一体全体何がどうなって……」

体中に木片やコケやら何やらがついているのに気づき叩き落とす。

「どうやらお前はあそこから落ちてきたようだぞ」

落ち着き払った態度の男の指差す方向を眺めると

なんと言うか余り受け入れたくない光景が見えた。

俺の住んでいた日本の街の何処かなどいう可能性は今この瞬間消え
うせた。

青い空、茂る森の木々の中に立っているのは俺が背中から落ちたら
しき建物。

打ち捨てられた礼拝堂や教会のような感じで、屋根の一部が凹んで
いる。

……明らかに俺の落下の痕跡だろう。

「……マジか……冗談きついぜ……ここ何処だよ……」

背中から落ちた落下の傷の痛みすら忘れるほどのショックだ。

これがいわゆる神隠しってやつなのか……

男らしくないが俺は頭を抱えて情けなく呻くことしか出来なかった。

「……お前運が良いな」

突き放したような響きのあるよく通る声で謎のコスプレ野郎が呟いたので切れそうになった。

「どこがだよ！」

「お前を見つけたのが俺じゃなく野盗や怪物の類ならお前は死んでる」

こいつの冷徹とも言える斬って捨てるような言動

事実と現実だけを直視した言い方に俺は確かな真実の匂いを感じて背筋が寒くなった。

「……いるの？野盗とか怪物とか聞き捨てならない言葉がきこえたんすけど」

コスプレ剣士は何言ってるんだこの阿呆は、というような態度で髪をかき上げながら答えた。

「……居るに決まっているだろう。お前は何処の平和な国から来たんだ？」

ああ……いつまでもお前では具合が悪いな。名前は？」

さくらだ ゆきひろ

「桜田雪平。あんたの名前は？」

「耳慣れぬ響きだな。俺はヴァイス」

端的にそう言ったコスプレ野郎……いや、もうコスプレ野郎と思うのはよそう。

一応落ち着いてヴァイスを観察する余裕が出てきた。

鎧についた細かい傷に小さな汚れ。身に帯びた剣や鎧はどう見ても使い込まれている。

コスプレじゃなく実用品として使わなければこうはならないだろう。それに身のこなしもそうだ。何かの武術をやっているように思える。俺も少しだけ心得があるからなおさら良く分かる。

ドッキリでもコスプレでもなくどうやらここは本当に訳の分からな
い異世界らしい。

「……行く当ても無え、金もねえ、帰れるかどうかもわからねえ。
何でこうなった。俺の未来も明日も全く見えねえ」

打ちひしがれて地面に手をつきがつくりと気落ちする俺に
ヴァイスが深いため息をついた後声をかける。

「……見捨てるのは簡単だが、それは余りにも安易すぎだな。
このままでは確実に野垂れ死ぬな、それも面白くない。

雪平、なんとかしてやるからついてこい」

やべえ、この人かっけえ……

人情が身にしみる……涙出てきそうだ……

コスプレ野郎なんて思ってたすいませんでした。

「すいませんよろしくお願いしますヴァイスさん！」

「ヴァイスでいい。さんは要らん。

ああ、生活が安定してきたらちゃんと掛かった費用は請求するから
な」

しっかりしてるなあ……

いや、それでも十分ありがたいけど。

第一話・郷愁、そして示された目的

俺がこの謎のファンタジーな世界に流れ着いてもう何キロ歩いただろっか？

正確なところは少しもわからない。

整地されていない森を歩くことなど初めての経験で

何度も足をとられて躓き、木々から生える小枝に引っかかれ

足元に生える草の棘に皮膚を刺された。

体は鍛えているつもりだったが慣れない事が重なりすぎて

足は疲労でガクガクだ。

ああ、ベッドで眠りたい……

夕方になった頃森を抜けて少し開けた丘のところでヴァイスが口を開いた。

「近くに水場もある。今日は此处で野営するぞ」

「ういゝす……」

ヴァイスは俺に小さなナイフを差し出してこう命じた。

「このあたりの草を刈って寝る場所を作るんだ。」

小さな石とかも取り除く」

それからヴァイスと俺は二人で草を刈って石を取り除く作業に没頭した。

なんとかその作業を終えて座り込んでいると

ヴァイスは荷物から文字が刻まれた杭のようなものを取り出し

地面に幾つも打ち込んでいく。ちょうどいましがた作った空き地を囲うようにだ。

「なんすかそれ？」

「虫除けと獣避け、警戒の式が刻まれた結界を作ってるんだ」

端的にヴァイスはそう説明した。

「……そっすか」

やっぱり魔法もあるんだ。

原理を尋ねたり効力に懐疑を示す余裕は今の俺には無い
まったく……ファンタジー過ぎて困るぜ……

それから二人で設営を完了させ

ヴァイスの煎れてくれたむやみやたらと苦いお茶のようなものを飲んで

体を温めながら火を囲むことでようやく俺は人心地つけた。

「あゝ帰れてえなあ……」

我ながら情けないと思いつつしみじみと俺は呟いた。

単調で機械的な学園生活の中で馬鹿なことをする。

日本で高校生をやった時はこれほどつまらないものは無いと

思っていたのだったが、いざ全く取っ掛かりの無い世界に放り出されて

初めてありがたみが身にしてみた。

平和も退屈も結構なことじゃないか。

コンクリートで海も川も大地も固められて鉛色の陰鬱な空

薄汚れていても、やはり故郷は故郷で楽しい事や美しいことも確かにあそこには有ったのだ。

だが今俺の眼に映るのは自然で一杯のクソッタレファンタジーの夜の闇ばかり。

文明の光などありはしない。

しかも怪物や追いはぎなどという現実味の無いものが跋扈する危険な闇だ。

「帰りたい、か。そうだな……故郷はいいものだ

それがどんな厳しい所であろうとも……」

ヴァイスから意外な一言が聞けた。

自分でも正直情けない事を言っただけと思うし

てつきり何か斬って捨てるようなことを言われると思ったのに予想外だ。

「意外だな……俺、てつきり甘えるなみたいなことを言われるかと思っただけ」

「お前は迷って此処にきたのだろう？誰だって心細いはずだ。それに俺だって故郷に帰る事を目指しているんだ。七つの【大冷孔】を解放し、遙か遠い故郷に帰る」

物憂げにヴァイスはそう呟いた。

悔しいがいやしかし絵になるなこの男イケメンすぎるだろ。

ちよつと現実離れした美形だ。

その物憂げな表情だけで女の子が放って置かないだろう。

向こうの世界ならそのままアイドルや俳優でもやっていけるだろう
なと思う。

それはそうと俺は思った疑問を口にする。

「大冷孔ってなんだ？」

ヴァイスが本当に驚いたような表情を形作る

「本当に知らないのか……？お前は何処から来たんだ？」

「日本だよ！につぼん！ああ、こつちじゃ通じないかもしれないな

……

えーと、チキユウの日本！テラ！アース！ガイア！」

俺は思いつくがままにそれっぽい世界の名称を並べ立ててみた。

「……本気で言っているのか？」

ヴァイスはいぶかしげに眉をひそめた。

「え、なんか俺おかしい事言った？」

「地球も日本とやらも知らんがまさかガイアとは……」

「え。知ってるの！？」

「ガイアは彼岸、あの世だ。天上に有る死後の世界……魂の行く場所とされている」

「あの世……マジかよ……こつちの世界……あの世……

一体全体……此処はどうなってるんだ……」

「信じないわけではないが何処から来たかは吹いて回らないほうがお前のためだ」

「分かったよヴァイス……頭のやばい奴扱いされたくないもんな」
「聞かれたら記憶喪失とでもしておけ」

「おう……で、大冷孔って何なんだ？」

「それを説明するにはこの世界の神話から始めなければならないな」

そついつてヴァイスは語り始めた。

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に居座り続けていた……

「へー。なんか、聞いたことのあるような無いような……」

空の星たちの支配権？何か引つかかるんだよなあ。

似たような話をどつかで聞いたような……

「小さな規模の冷孔は山ほどあって、その傍に村があったりするな。地上にはびこる怪物退治や冷孔に居座る大物の怪物を退治する職業

【バスター】は今も引く手数多だな

功績によつては栄達、栄耀の道が開けるし貴族になれることもある」

「なんとなくニュアンスで冷孔がこの世界で重要視されてるのは分かったけど何故なんだ？」

そして何で怪物が居座ってるのは分かったけど何してるんだ？どうして怪物をどけなきゃならない？」

「あー。そこも説明しないといけないか……いいか？」

冷孔を開放する利点の方から説明するとだな……

第一に冷孔の開いているところと閉じている所では土地の実りの豊かさが全く違うんだ。

それに冷孔から出た魔力だけじゃなく冷気は食料の保存に使える。

第二に魔法で出来ることが増えるんだ、冷孔のバックアップ有りと無しじゃその強さは比較にならなくなる。

煮炊きする火。安全な水も魔法で出せる。魔法で作られる様々な便利な魔道具も作れる……

何より大きいのは魔物、怪物避けの結界を冷孔の魔力で展開できることだ。

冷孔の開いていない土地でも魔法は使えるが生命力精神力を直に削ることになる」

「あー。なるほどなあ……食べ物と技術と防衛が……大事だよな」
子供でも知ってることなんだがなあ、とヴァイスが肩をすくめ付け加えたのがちよつと辛い
ほんとに、迷い込んできただけの一般ピープル、健康優良日本男児なんだよおれは。

「他にも魔物をどけなきゃならない理由はな

悪神、邪神の使いとされている魔物や怪物は基本的に人を殺し、喰う」

「うわぁ……」

「冷孔に居座る大物は魔力を吸って生きるからその場から殆ど動かないが……」

「その大物の怪物に魔力を食われてその冷孔は使い物にならない、と」

「その通り。冷孔に居座ってる大物は地上をうろつく怪物や魔物とは比較にならないくらい強い。

保有している魔力の桁が違うからな、肉体も強化されてるし中には強力な魔法を使う知能の高い奴もいる」

「なるほど、じゃ、大冷孔ってのはその凄い奴か」

「ああ、現在見つかつてる大冷孔は全部で十、その内解放済みは三つ……」

現在、世界最大の三つの都、帝都、王都、神都になっている」

「なんか凄いいんだな」

「一個でも解放すれば最大級の名声と富が得られるだろうな。歴史上、英雄と勇者と初代教皇以外、大冷孔の解放には成功していない……」

さつき、一般的な神話に対しては話したろ？」

「善き神様が、とかつてやつだろ？」

「冷孔の解放は民を富ませ怪物の脅威から人を護るだけではなく神意にも沿うと」

一般的には考えられている。冷孔を解放すればするほど

悪しき神の力は弱まり善き神が強くなる……

つまりは宗教上の権威も非常に大きいんだ」

「なんか色々ともめそうだなあ」

「そう、もめる。具体的には冷孔を開放する命知らずは常に歓迎されるが開いた後の利権がなあ……」

「まためんどくさい話だなあ……細かいことはあんまり考えたくないぜ。」

とりあえず冷孔を開放すれば皆にとって良いんだろ？」

「民は富むな。それがきちつと分配されるかどうかは別問題だが」

「だったらそれでいいんじゃないの？」

「……それにな、もし雪平が本当に帰りたい

いや、生身のままガイアに行きたいのなら……

大冷孔を開くことでしか可能性はないと思う」

「どういうことだ!？」

「大冷孔の魔力を利用してガイアまでの空間を繋げる魔法を使うんだ。」

冷孔の魔力を利用して長距離転移をする術式は存在するが

ガイアまでとなるとまるで未知の領域、雲を掴むような話だ」

「未知だろうが何だろうが可能性があるならとにかくやるっきゃね

ーよなあ……」

「そういう結論になるのか？」

「はい？」

なにいつてんだ。その結論しかないだろ。

「俺が送ってやるから危険を冒さず街で暮らすという手もある」

「やだよ。チャレンジしないうちに諦めて安易な道に走るのなんて俺の世界そんな奴らばかりだぜ。そんなの俺はもうごめんだ。」

危険は嫌だけどさ、どうせ命は軽いんだ。

「やっても居ないのに逃げるのは死ぬより嫌だ」

拳を握り締め自分に言い聞かせるように俺は吠えた。

「夢はでかくハートは熱く！能力や見た目や持つてる金が価値の全てじゃねーだろ！

男の生きる道に本当に必要で頼れるのは

己の燃え滾る鋼の魂！元の世界じゃ理解も賛同もされないし

古臭く錆びちまったが……俺はこういう生き様が好きなんだよ！」

俺は俺の生き方が元の世界じゃ時代遅れなんじゃないかなーとは
うすうす気が付いてた。

でも時代遅れだろうが俺は好きなものは好きという。

それが本当の個性ってやつなんじゃねえの？

「……くっ、くくくっ、はーっはっはっはっ！こいつは良い」

！！痛快で傑作だ！！

俺みたいな大馬鹿が他にも居たとはな！！」

「俺にはヴァイスが馬鹿には見えないぜ。少なくとも俺より賢そう
だ」

「いやいや雪平、俺の目的である七つの大冷孔の解放なんて世間的な価値観に照らし合わせれば

十分大馬鹿の戯言、鼻で笑われる子供の夢想のようなものなんだよ。一つで英雄や勇者に成れる大事なんだ。七つ全部は……」

「こまけえことはいいんだよ！世間がなんと言おうがやるつもりなんだろ？」

「やって故郷に帰るんだろ？」

「無論だ」

「じゃあそれでいいじゃねーか」

「……片や、七つの大冷孔を開放すると決めた大馬鹿と片やガイアを目指すと言った大馬鹿か……子供の空想だが悪くない。悪くないぞ」

「じゃあ、まずは雪平には怪物と魔物を狩り冷孔を開放する【バスタ】になってもらわなきゃな！」

第一話・郷愁、そして示された目的（後書き）

主人公、熱血馬鹿。

そして世界観の説明を少しさせていただきました。

第二話・最初の街

夜明け近く、まだ眠い眼を擦りながら

ガッチガチに石の様に固く、黒ずんだパンと

塩気のきつ過ぎる干し肉の朝食を俺は齧った。

分けてもらって悪いとは思いつつ俺は切り出した。

「なあ、飯って何時もこんな感じなのか？」

ヴァイスは少し顔を顰めながらこう答えた。

「……俺は料理は出来んのだ。」

自分でやってみたことも有るが古びた匂う革靴みたいになくなった
明けても暮れても戦いばかりやってたからな……

それに旅の間の保存食は何処へ行ってもこんな感じだ

それでも食えるだけマシといった所だな。

食料自体がこの世界じゃ貴重なんだ」

ヴァイスさんは出来そうなイメージがあっただけだなあ。

冷静沈着で銀髪紫眼の二枚目イケメン剣士ってだけの先入観で

判断するのはやっぱりよくないな。

ううむ、それにしたってこれは酷い。

やっぱり日本とファンタジー世界じゃ違うんだな……

国によって大分食文化や料理の腕前は違うって聞いたことあるけど。

日本の食事って美味かったんだな。

よし、決めた。

現状に不満を言うのは誰だって出来る。

安易な道に流されるのは嫌だ。

自分から建設的な事を始めなければ何一つ変わらない。

「なるほどなあ……一回でいいから今度作るときは俺に任せて貰っ

てもいいですか？」

「心得があるのか？」

ヴァイスが少しだけ嬉しそうな顔と声色をした。

本当に微かな変化だが。

分かりにくい人だが、信賴には値すると思う。

「多少なら」

「……今、お前を拾って初めて良かったと思ったぞ」

やっぱり、ちよつとは厄介者と思われてたんだなあ。

何時までもこの立場に甘んじているわけには行かない。

速い所、なんとかしないとイケないな。

食事の後、朝日に照らされながら俺たちは出発した。

道中、絶えずヴァイスが周囲に怪しい影が無いかを配っている事が良く分かった。

怪物や追いはぎに不意打ちされるのは俺だつてごめんだ。

こついうところはヴァイスは旅慣れているらしく本当に頼りになる。

「タジンの町が見えてきたぞ」

いくつか丘を越えたところで街が見えてきた。

高さは大体三メートルくらいのレンガの壁に囲まれている。

「行くぞ」

「うーす」

門のところでは草木染と思しき赤や緑のチュニツクのような

衣服を纏った商人らしき人が馬車を門の中に入れている所だった。

周囲には皮鎧や金属製の鎧を纏った護衛や傭兵らしき人たちの姿も見える。

順番を待つて門の前にたどり着くと門番らしき人に呼び止められる。

「そこで止まれ。身分を証明するようなものは持っているか？」

ヴァイスは黙って荷物から銀色のプレートらしきものを差し出す。

「バスターか……何時もご苦労さんだな」

門番らしきおっさんは俺のほうをジロジロ見ている。

「見慣れない格好だな……」

「そっちは俺の連れだ。バスター見習いをやらせようと思っている」

「ふむ……」

いぶかしげな目線を送る門番のおっさんにヴァイスが何かを握らせ
た。

「いつも大変だな。これで酒でも飲んで体を温めるといい」
途端に門番の顔が疑惑から喜びに塗り換わる。

「おう、こいつはすまねえな。へへ……話の分かる奴は嫌いじゃな
いぜ

おい、もう行つていいぞ。そっちの餓鬼も死なないよう頑張ること
だな」

門番のおっさんは掌に握った銀貨に集中して俺たちをもう見ていな
い。

やっと俺たちは町の中に入れた。

「マジ助かったよヴァイス……俺はこっちの身分なんか有りはしな
いからなあー」

「忘れていいぞ。金で解決できる面倒もあるということだ。

……その服は目立つし余り戦いには向いていないな」

「変に注目を浴びるのもやだしな

また頼りっぱなしだな……ほんと悪い……」

ヴァイスに申し訳ないし

なにも何も出来ない自分がちよつとみじめだった。

「忘れていい。初期投資は仕方が無い。

お前にとつて幸いなことに俺は賭けもやらんし

女を買ったり酒や煙草もやらんから蓄えは少々有る」

ほんと禁欲的というかストイックな人だな……

「マジでありがとうございますアニキ……」

自然とそんな言葉が口をついて出た。

なんだろう、なんだかそんな感じがするんだ。

自分に兄弟や兄が居たらこう呼んでいたと思う。

「アニキ、か……」

ヴァイスはなにやら考え込んでいたようだったが
直ぐに軽く頭をふつて俺にこう告げた。

「まあいい、宿を取ったら服と鎧、それに武器も見繕わなくてはならん。」

他にもやること覚えることはいくらでもある、ぐずぐずするな」

「はいっ！」

ぐだぐだ考えるのは後でも出来る。

いまはやるべき事をやるだけだ。

第二話・最初の街（後書き）

バスターになる為に最初の一步を踏み出した主人公。
いまだにヒロイン未登場。女っ気が無いなあ。
本格的に魔法を習得するのは何時になることやら……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764z/>

オープンドシール

2011年12月20日21時05分発行